

医療・医科学プラットフォーム・セミナー@白金台

夏目漱石のこころ出版から99年目に、 藝術・文学によるSuicide Preventionを目指す ミニシンポジウム

2013年 9月20日(金) 14:00 - 19:00

東京大学医科学研究所 講堂 (港区白金台4-6-1)

はじめに ～何故、いま夏目漱石と「こころ」なのか？ 山川彰夫 (世話人幹事)

第一セッション 「夏目漱石と門人の病跡学～藝術・文学とメンタルヘルス」

「漱石と近代日本の不安」

内海健 東京芸術大学保健管理センター 教授、精神科医・産業医

「夏目漱石の『こころ』—精神医学的考察」

高橋正雄 筑波大学人間系 教授、精神科医・産業医

「夏目漱石の「こころ」出版から99年目に、産業医の目から、漱石とともだちのワーク・ライフ・バランスを振り返る」

山川彰夫 東京大学医科学研究所 研究所産業医(内科医)、特任教授



第二セッション 「うつ状態とSuicide prevention～その傾向と対策」

“Activities of TELL: From Lifelines to Outreach programs such as School Awareness and Suicide Prevention.”

Vickie Skorji NPO団体 TELL (Tokyo English Life Line) Lifelineディレクター

“Turning the tide against suicide in Japan.”

Rene Duinigan 駐日欧州連合代表部経済担当官 『自殺者1万人を救う戦い(Saving 10,000: Winning a War on Suicide in Japan)』監督

「うつ状態、自殺予防と認知行動療法」

大野裕 国立精神・神経医療研究センター 認知行動療法センター長

「総合質疑・パネルディスカッション」 上記講師+パネリスト2名:

厚労省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課担当者

近藤伸介 東大医学部附属病院 神経精神科助教

「夏目漱石のこころ出版から99年目に、藝術・文学によるSuicide Preventionを目指すミニシンポジウム」

【概 要】

2013年9月20日

日本ではメンタルヘルス関連で休職をする働く人、ひきこもりや休学を余儀なくされる学生の数は、増加のトレンドが続いて居ます。精神疾患やメンタルヘルス失調については、5人に一人は一生のうちにかかるほどよくある病気とも言われていますが、日本や東アジアでは文化的・歴史的因子もあって、一般人の精神疾患への理解が遅れ、精神科に受診する事にまだハードルが高い事が問題とされています。日本の自殺件数は、1998年から3万人台を超え続け、2006年成立の自殺対策基本法などの様々な対策が取られつつあり、2012年は27,766人で前年度から10%程度の減少がありますが、まだまだ道半ばと言えます。WHOの統計では、日本の自殺率はUSAの2倍、フィリピンの12倍です。社会や行政のマクロレベルの対策だけでなく、大学・企業・病院などのミクロレベルや個人や家庭・友達・同僚などのパーソナルレベルでも、日本の現状の課題を更に分析し、解決策を図り、その知識を広げる努力が必要でしょう。

一方、近代日本の文学者・芸術家は、創作の悩みも深いためか、精神疾患に悩んだり、自殺企図や自殺で亡くなった人も多いとされています。西洋でもゲーテなどの芸術家に限らず、マックス・ウェーバーなど天才的研究者にも、現在の目から見て精神疾患を抱えていたとされる人は数多く存在します。1916年に胃潰瘍で亡くなった日本近代文学の第一人者の夏目漱石も、自身が「神経衰弱」に悩みながら、49歳の寿命で多くの作品を残し、現在まで影響を与え続けていますが、漱石や芥川龍之介など、彼らの生涯と作品の中にその悩みと苦闘を読み取ることが出来ます。友人や知人との支え合いがあったことも明らかにされています。偶々来年2014年は、漱石晩年の傑作で、肉親との死別や自殺をテーマとした「こころ」が出版されてから「100年目」に当たります。

今年が「こころから99年目」に当たるのに因んで、藝術を通じ、専門家の支援を得ながら、日本のメンタルヘルスを向上するためのイベントを開催し、日本近現代のメンタルヘルスや自身たちのLifeの「振り返り」と「今後の日本社会への提言」をフロアとも一緒に考えたい、というのが本企画の狙いです。この小さいステップをきっかけに、他部局や他大学などでも、その場にあった枠組みでイベントや振り返りが続いて、アウトカムとして、それが日本社会のメンタルヘルス向上につながっていけばと、企画サイドは願っています。そうして行く事が「神経衰弱者や悩める人に対する良き精神療法的治療者」でもあったとも考えられる（高橋教授説）夏目漱石にとっても本望なのではないでしょうか。

今回は漱石や門人たちの病跡学や精神病理学、双極性障害などの著作のある精神科医・研究者、「日本社会の自殺防止」を目的とした映画の自主制作をされたアイルランド出身の知日家、長年NPO団体で外国人のSuicide Preventionのサポートを続けているTELL代表、うつ病患者だけでなく他の精神疾患や健常人のメンタルヘルス向上の効果にも注目が集まっている認知行動療法の専門家などの方々を講師にお呼びしています。最後に、これら講師陣の目に、若手精神科医の目、行政担当者目の目も交えて、夏目漱石を偲びながら、秋のお彼岸休みの直前の夕方に、フロアからの質疑やパネルディスカッションを行う予定です。このプラットフォーム・セミナーの「場」にお越しくださることをお願い致します。

事前登録不要・参加無料の公開企画ですので、学内・学外にかかわらず、ご興味・ご関心を持たれる多くのアカデミア・産業界・行政・メディア・一般の方のご参加と質疑へのご参加を歓迎致します。お知り合いにもどうぞご紹介下さい。

(文責:世話人幹事 山川彰夫)